

2014年3月期 決算説明会Q&A要旨

日本水産株式会社
経営企画IR室
広報IR課

- Q. 予算の内訳について、増益要因の大半が昨年同様の合理化・撤退効果が多いようだが、構造改革・撤退などは一巡したとみてよいか。来期の特別損益は数字上あまりプラスマイナスがないように見えるが、プラス要因・マイナス要因はないのか。
- A. ここ数年間で、インドネシア、アルゼンチン、ブラジル、ドイツなどの不振事業から撤退してきており、大きな損失が発生するような事業は現段階では想定していないので、決算短信補足資料では「海外の不振事業に一定の目途」という記載とした。特別損益については全くないということではないが、大きく影響を与えるものはないと想定している。
- Q. 市況の下落リスクをどの程度保守的に見込んでいるか。単体、南米、北米について教えていただきたい。
- A. 鮭鱒市況については、2013年度は急激に上昇したといえるが、店頭価格を考えると下落リスクもある。高い相場での仕入在庫もあり粗利確保が難しくもあるため、市況が悪化した場合のリスクを見込んでいる。ニッスイ個別だけでなく、南米やヨーロッパでも市況の下落リスクを一定程度織り込んでいる。
- Q. 復配の考え方について、構造改革の成果は出ている反面成長の芽が感じられない予想に見えるが、投資と復配のバランスについてどのように考えているか、早期の復配があるのか教えていただきたい。
- A. 2012年度中間期に利益剰余金がマイナスになり、無配にさせていただいたが、それがこの2年で少し増えてきたというのが実態であり、復配の時期及び金額については来期の事業の状況を見ながら判断していきたい。
- Q. 配布資料のセグメントマトリックスでは、日本の食品事業で2015年3月期の見通しは9億円の増益となっているが、どういうリスクがあってどういうコストダウンが見えているのか具体的に教えていただきたい。

A. リスクとしては為替の影響と原材料のコストアップがあり、為替の影響は1ドル=108円の想定で13億円のコストアップを、原材料では14億円のコストアップを見込んでいる。価格改定、販売費削減、固定費の削減でコストダウンを図る予定である。

予算作成時に為替予約をしており、その分については計画に反映している。また、今期は長期の為替予約もしており、102円程度で半分以上は押さえている。こういった打ち手を打ちながら、価格改定や経費削減にも取り組んでいく。

Q. 上期に営業利益64億円見込んでおり11億円の増益になるが、水産・食品・ファインでどうみているか。

A. ロヒタムは売却を完了していることから、上期では9億円程度の増益となる。ゴートンズは昨年上期ではマイナスだったが、前年第4四半期からプラスでいまのところきている。国内の食品会社も多少増益要素を見込んでいる。

EMDEPESは事業構造上、上期は貧漁でドックに入っていたりするので赤字の状況はあまり変わらないと見込んでいる。SAは前年と比べると魚価が良くなっているので、プラスになると見込んでいる。

Q. 営業外についてはプラス10億円改善する数字になっているが、持ち分損益は昨年のマイナス3億円からどれくらい改善するのか。シーロードはプラス圏で推移していくと見てよいか。

A. 持ち分損益は前年比25億円プラスで見込んでおり、その大半がシーロードで、それ以外は大きな増減はない。

Q. 魚価の考え方について、なぜここまで魚価が上がったのか、またどのタイミングで下がるとみているのか。

A. バナメイえびは魚病(EMS)が蔓延したために供給量が減り価格が上昇した。鮭は需要が堅調であるとともに、南米で魚病があったため価格が上昇した。

Q. ゴートンズの業績について、昨年は上期が低調で下期が好調ということだったが、これは一過性の要因と考えてよいのか。

A. 北米では価格競争が激化しており、ゴートンズはトップシェアであるがゆえに他社からの攻勢を受け、これに対応している状況である。特にカナダでの競争が激しく、カナダ工場については閉鎖するという方針を出して迅速に対応したことにより、復調してきている。このような点から一過性のものであるとみている。

Q. 冷凍食品業界での農薬混入事件の影響について、シェアの変動や影響はどのようなものがあるのか。

A. 中国での餃子事件の時はマーケット全体が落ち込んだが、今回の事件ではそこまでは落ち込まなかった。それほど大きな影響はなかったが、食品の安全・安心の取り組みをあらためて見直し・強化している。

Q. 魚価の下がる要因として、需要面（さけの需要が好調なのが魚価が高くなったことによって弱くなるのか）と供給面（魚病の要因がすでに良くなってきているのか）で変化の兆しが見えているのか。

A. えび、さけの魚病に加え、急激な為替の円安によりコスト高になったが、日本のマーケットがこれを受け入れた。主力商品のえび、さけの高騰に連動して他の商品も上昇した。

えび・さけともに相場は4月段階では下がっていない。トラウトについては、魚病（SRS）は根本的に解決できていない。紅さけは7月アラスカ・8月カムチャッカ・カナダブリティッシュコロンビアがポイントで、特にカナダのブリティッシュコロンビアについては4年に一度の大豊漁年に当たり、前回4年前の大豊漁では相場が暴落したこともあり、様子を見ている状況である。

えびの魚病（EMS）も特効薬はない。バナメイえびの収穫が中国・タイでは6月なので、魚病を克服できれば大量に生産されて相場が下がる可能性があるがあるのでその動向を見ている。

以上